玉造中だより
楽し学舎（まなびや）
No. 2
R2・4・13

再び臨時休校に・・・
一人が感染と生活を乗り越えよう

他人事と思わないで！

玉中のHPには毎日先生からのメッセージが

令和二年度が順調にスタートすることができたと思ったら、再び新型コロナウィルスの感染拡大に伴う臨時休校が十日から始まりました。「またか・・・」と思った人も多かったと思います。しかし、現状としては危機的な状況にあることを知って欲しい。茨城県も感染者が毎日増え続けている。そして近隣の市町村でも毎日のように感染者が出ている。果たしてこれを他人事のようにうけとめていいのでしょうか。もし、自分や家族が感染してしまったらと自分事として受け止めて欲しい。「行方市でもいつかは・・・」と考えれば、自然と行動も変わってくるはずです。

「不要不急の外出」はしない

この新型コロナウィルスは人から人へと感染していくのが特徴です。その予防としては、とにかく「不要不急の外出をしない」ということです。「一人一人が、普段よりも人との接触を八割減らせば、感染者は確実に減少する」と安倍首相も言っていました。全体として感染者を減少させるには、一人一人の心がけが大事だということです。

三密（密集・密閉・密接）を避ける

同時に言われていたのが、「三密」（密集・密閉・密接）を避けるということです。室内であれば、換気をよくする、人混みを避ける、人との距離をおくことです。

「うがい」「手洗い」「マスクの着用」を

予防としては「うがい」「手洗い」「マスク着用」。何回も言われていることです。某CMで「あなたは大丈夫でも、あなたの大事な人にうつしてしまったらどうしますか？」というのがありました。まさにその通りだと思います。

新入生のみなさんようこそ玉中へ！
第五十八回入学式行われる

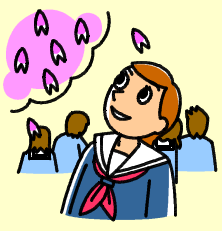
七日、第五十八回入学式が行われました。当日は、新型コロナウィルスの感染拡大防止のために、在校生は三年生のみ、そして式の内容も大幅に変更されましたが、緊張の中にも温かい雰囲気の中で

在校生からの歓迎の言葉

新入生を迎えることができました。新入生の代表からは中学校生活に期待する誓いの言葉があり、在校生からも生徒会長から、在校生一同、新入生を歓迎すると同時に、これから玉中生として頑張って生活したいという激励の言葉がありました。これからみんなで玉中を素晴らしい学校にしていけることを確信できた入学式でした。

式場準備の姿に三年生の意気込みを感じた

今回の入学式の準備は、前日に行われ、玉中の「顔」になった三年生が担当してくれました。



玉中を代表する学年ということで、その準備の様子を拝見させていただきました。しかし、その心配はすぐになくなりました。一人一人の三年生が、自分の役割を、責任持って行うことができました。何もせずにフラフラしている三年生は誰一人いなく、見事な準備の様子でした。

この三年生の姿から今年の学校の「顔」として、安心して玉中を任せられるという確信を持つことができました。三年生のみなさん、ありがとうございました。

今だからこそ「できること」！

この臨時休校期間をプラスに考えることでいろいろとできることもあることに気づくはずです。

「学びなおし」の時間が十分にとれる

ある生徒に休校期間中の生活について聞いたところ、「一年、二年のときの復習の時間が十分にとれる」という回答がありました。確かに、これまでの学習内容で苦手だった、よく分からなかったという部分にじっくりと取り組むための時間はあります。今回の休校の過ごし方が、休校が開けてからの「学力」に大きな差として現れてくることは間違いありません。

好きな本をじっくり読める

国や県においてもこの期間を利用して、「読書」をすすめています。普段、なかなかじっくりと本を読むことができませんが、この期間であれば、読みたい本をいくらでも読むことができます。YouTubeもいいですが、本を読むのも、もっといいものです。

身体を鍛える

今、様々な世界で活躍しているアスリートの動画が出ています。一人だって、室内だって鍛えることはできます。何も大勢じゃないと身体は鍛えられないということではありません。トップアスリートから学べることはたくさんあるはずです。

編集後記

四月のある光景から思うこと

春休み期間中、何人かの新入生がお父さん、お母さんと一緒に新品の自転車で校門の所にいる光景を見ることができた。新年度に向けて、これまでのスクールバス通学から、自転車での通学という大きな転換に、春休み期間中に、少しでも慣れるための練習ということだろう。毎年、春の恒例の光景となっている。親にとっては不安で不安でしょうがないだろう。私も子どもが中学に入学するときに同じような経験をした。七キロの距離を、交通事故に遭わずに三年間通学して欲しい、願うのはそれだけだった。「ただいま」と帰ってくると、その声を聞いてホッとしたことを覚えている。雨が降ると車で送っていこうかと思うこともあった。でも、そこは心を鬼にして、カッパを着て登校する我が子を見送った。困難な場面に遭遇したときに、親が安易に手をさしのべるのではなく、自分の力で乗り越えさせる。おかげで三年間続けたことで、身体も心もたくましくなったような気がする。

中学校の三年間は多感な時期だから様々な事があるだろう。いいことばかりではなく、悩み苦しんだりすることもある。そんな時に、じっと見守ることも必要だ。子どもは自分で乗り越えようとする力を持っている。ところがそれを我慢できずに大人が手をさしのべてしまうと、子どもはそれ以降、自分で乗り越えることをしなくなる。何かあると助けてもらえるという「学習」をしてしまうからだ。だから「（都合の）いい親」にはならないようにしよう。

（文責：小野口　吉政）